

漫画家 松本零士 氏 (全文)



Q. 猪苗代湖や裏磐梯、あるいは福島県の自然について、どのようなイメージをお持ちですか。

A. 私は、九州久留米生まれの小倉育ちで、先祖の地は愛媛県大洲市なんですね。自然環境は見慣れているんです。福島県に伺ったときの、風景の美しさ
と自然環境の良さ、これは永遠に保存すべきだと。自然環境が風景の美しさ
だけではなく、人々、動植物の生活を助けているわけですよ。とてもとて

も大切な場所である。きれいな風景を見ると元気になります。

福島県には何回も行ってきます。特に裏磐梯の湖とか、いろいろなところを見て回っております。泊まった
こともあるし、風景が好きで、いつも、通過するときでも、飛行機の中からも見たりして、楽しんでいる。

自然環境は大切なものです！

日本列島は、島というけれど、島ではありません。巨大な大陸なんです。その中にある大自然ですから。人
はできる限り守らなければならない。福島県の自然は、うらやましいくらいの光景です。

Q. “漫画家”というお仕事について教えてください。

A. 自然環境が好きで、自然の中で育った。終戦のとき、8/15の正午、愛媛県大洲市の新谷、矢落川^{にいや}という、
坂本龍馬脱藩の川で泳いでる最中だったんです。B29の大群が毎日、宇和島の方から頭上を飛び越え、汽車は
転覆し、我々も機関銃で撃たれましたんでね。

そんな中でも、学校の行き帰りは自然環境とのふれあいを楽しみだったんですよ。蜂の子を食べたくて、蜂
と格闘したり、蜂を襲う側なんです。クマバチの巣を襲ったりしてたんですよ。川で泳いで、鮎や魚をとろう
としていたんですよ。

ところが、玉音放送のとき、愛媛の新谷というところの母方の実家に戻ったら、雨戸が締め切ってあった。
こじ開けると、ぼあさんが上がり框に座って、武士の家ですから、刀や長刀を出して磨いているんですよ。「ど
うする？」と聞いたら、「敵が来たら、これで刺し違えて死ぬのじゃ。おまえも侍の子じゃけん、覚悟せい。」
と。日本国落城の瞬間ですから、敵が来たら、家族が刺し違えて自決の覚悟をせよ。ということだったんですよ。
そういう体験をした世代が漫画を描くうえで、実体験としてありますから。心理状態、自然環境、十分に
活かすことができている。得がたい体験をしている。

父親は飛行士でした。終戦後2年半抑留で帰ってこなかった。さみしさとどう生活していったらいいのか
という思いでね。

2年半後、父が帰ってきた。大衡村というところに、おじいさんが家をもっていたんですよ。雲よりも高い位
置から大洲城を見ながら、分教場に通っていた。途中で、蜂の巣を襲いましたけど、襲われたときはうまく逃
げ切った。石をぶつけて撃墜しました。どういことをすれば危ないか、自然環境とのふれあいから、よくわ
かっているんです。

火球（世界中でも見る人が少ないような巨大隕石）が墜ちてきたのを、2日間続けて同じ角度で雲をつらめ
いて落ちてくるのを目撃しましてね。砕けちって墜ちたところも見に行った。かけらは見つけれなかったん
ですが。高い山を見上げて、毎夜、天空に浮かぶ星とかを見ながら、助けられました。

父が帰ってきて、山に炭焼き小屋をつくって、夜中に炭を焼いていた。薪をくべる手伝いをしていた。きれ
いな星が見えた、火星なんですよ。「火星人はあるか？」と聞いたら「あるかもしれんし、おらんかもしれん。」
新谷にいたときから、天空を眺め、星空に興味を持っていたんですよ。学校の先生からはアンドロメダ、オリオ

ン、いろんなことを教えてもらい、自然の中で一生懸命天空を見上げて…そういう世代なんです。この体験が非常に自分に夢を与えている。

私は戦争中、明石にいた。明石公園の中で虫をとり、池に飛び込んで魚をとるような、暴れ回っていたんです。虫が好きだった！

明石で、昭和18年、5歳の時、日曜日に「くもとちゅうりっぷ」という戦争中につくられた日本のミュージカルアニメーションを、姉と観に行った。そしたら、なんと、同じ日に同じ映画館で同じ時間に、15歳の手塚治虫さんが来ていて、あの方は宝塚市に住んでいたんですが、偶然にも観ていたんですよ。両方アニメマニアだったんですよ。（笑）

私は、5歳の頃から漫画やアニメーションのまねをして描いていた。父の趣味で、映写機が家にあったもので。フィルムとはどんなものか、ひとコマずつの動きが分かってましたんでね。紙に描いて貼って見たんですけど、紙ですと引きが強いので2、3回転するとちぎれるんですよ。でもひとコマひとコマの動きがわかるんですよ。

そうした様々な体験が全て、有効に作動したんですよ。得がたい体験！

九州にもどって、小倉のおじさんの家において、五軒長屋のぼろなところに入りましてね。父が公職追放され、極貧に落ちたんですよ。だから、野菜の買い出しをして立ち売りをしなきゃいけない。そんな中、ぼろ長屋に住みながら漫画を描いていた、小学生の頃から。小学校でも、授業中に描いてもいいと先生に言ってもらい、描いていた。

父につきそって買い出しに宮崎まで行ったり、山登りも平気。そして、小倉というところは占領軍のつぼです。負けるとはどんなことか、この目でみているわけです。ものすごい体験なんですよ。

アメリカ兵が捨てていく10セントコミックというアメリカの漫画雑誌（ティズニーやスーパーマン、スパイダーマン）を読んでは捨てていくんですよ。それを拾って1冊5円、10円で売っている屋台があって、ティズニーやスーパーマン、スパイダーマンを全部見たんです。小学生から中高校生と漫画を読み続けて、それで英語の学習をやったので、英語の読みができるんです。

学校では、不思議なことに先生がね、絵も描けるなら字も書けるはずだといって習字も習わせられた。漫画家になりたいなら日本語だけじゃだめだと英語もたたきこまれましたね。英語だけはしゃべれるようになった。漢文もたたき込まれて、漢詩も読めるんですよ。旧漢字の本も読めるんです。

後日、「児女英雄伝」という漫画を、ほぼ1年間連載をしたこともあるんです。万里の長城まで行って物語の場所を見学してから描いたんですよ。

いろんな体験ができたので、非常に幅が広がったんです。それが自分を助けてくれた。

そして戦後はですね、アメリカ映画を観ていまして、小学校3年か4年のとき「嵐とともに去りぬ」を観たんですよ。そういうものが全て自分の学習になっている。

不思議なことにね、小学校の同級生が、ベートーベンの1番から9番のレコードをくれたり、当時道路や畑にレコードが捨ててあってですね、そのレコードを聴いていまして。音楽は小学生の時からクラシックを聴いて育ったんです。蓄音機でかけてると、母親がびっくりしましてね。「おまえ、それわかるのか！」と。私は音楽を聴きますと音楽が映像化するんですよ、頭の中で。憧れの映像になるんです。そういう体験からも漫画家になれたんです。

私は火星も好きだったので、今頃火星に行っている予定だったんです。貧乏だったので、大学受験のとき、機械工学部に行こうとしたんですが、先生にも「松本、大学に行かんでもいいのか」と。「俺は行かなくてもいい

いから、弟は行かせてくれ」といって、受験に成功してたんですが、自分は無念な思いで諦めたんです。ただし、弟が機械工学部をでましてね。機械工学の工学博士になったんです。私は、東京へ行って、弟に仕送りをした。家族のためにも、なにしろ7人兄弟の真ん中。9人家族で、食べるのも大変だった。

幸い、北九州は、毎日新聞西部本社、目の前に、朝日新聞西部本社があり、松本清張さんとも知り合いになり、輪転機の印刷、製版の技術も学びましてね。「絵をもってこい、製版見せてやる」って製版部のおじちゃんに言われて、小学生の時から、製版の線の出方を覚えたわけです。大学へ行っているのと同じですよ。

そして、中学、高校在学中は、朝日小学生新聞はディズニーの漫画を連載していたため受け入れられなくて、毎日小学生新聞で、ずっと学費を稼ぎながら、連載をしていた。卒業後は、直前に漫画雑誌に入選して、新人王をもらいましてね。私や石ノ森氏やみんな応募していた。一等になれたんで、賞金をもらいまして、それで上京を決めたんです。父親から「それは自分で決めたのか」と問われ、「自分で決めた」と。「よし、そんなら行け。」と。自分で決めるかどうかがいかに大切かを父親から教わってるんですよ。

編集部から、「一刻も早く雄姿を現したまえ」と手紙が来たんです。「雄姿を現したいのですが、お金がありません。」と。「ついては原稿料の前借りはできませんか。」「来れば渡す。」と言われ、何もかも質屋に置いて画材だけを持って、普通列車に乗って、小倉駅から24時間かけて上京したんです。行きの切符だけしか持っていないんですよ、帰りの運賃はないんです。

俺は死んでも帰らん！と思って。

汽車の中では、隣りに座った人が優しいおじさんでね、食べ物をくれるんですよ。「これ食べ」って言ってね。新婚旅行のご夫婦もお弁当をくれたり、やさしかった。酒を飲めと言われ、飲んだ振りをして窓から捨てたりしたんです。みんなやさしかったんです。

夕方5時半頃、東京駅について、皇居前の二重橋に行って…その前の年に修学旅行で東京に来てるんです。皇居の二重橋の木に、俺は必ず来るぞと誓いをたてて帰ったんです。だから、俺は来たぞ！と木をなでてから、編集部に行ったんです。編集部がちゃんと原稿料をくれましてね。

そういう青春の思い出が東京駅にあるんですよ。そういう青春の思い出が自分を支えてくれる。

ですから、「銀河鉄道999」は実はこの思い出によって創られたんです。死んでも帰らん！と言って汽車に乗る鉄郎の気持ちは文字どおり自分なんです！

関門トンネルくぐるでしょ。そこはまるでフラックホールですよ。下関側にでると、風景が別世界に見えるんですよ。瀬戸内海を見ながら、富士山を見て、東京に着いたわけですよ。

今でも新幹線に乗ると、私は目を皿のようにしてその風景を見続けている。自分を支えてくれたんでね。

東大前に下宿しましてね。東大がそばでしょ。糸川英夫博士の研究室があったんですよ。許可も得ずに入ったら、先生に捕まって、「許可もらって入っているのか」、「いいえ」、「そんなこと言ったらひっぱたかれるぞ」とね。だけど、「何に興味がある？」と言われたので、「生命の歴史や宇宙に関心があって、機械工学者になりたかったんです」と言ったら、「そんならいい、勝手に触れ。」と、どんどん触らせてくれましてね。

糸川さんが亡くなる直前にね、毛利さんの科学館で、お会いしたんです。

毛利衛さんとも知り合いなんですよ。毛利さんが宇宙に行ったときに私の時計を持って行ってくれた。NASAの証明書がついているんですよ。

その時に、「生命の歴史や宇宙に興味があった、機械工学に行きたかったです」と言ったら、ぼーんと背中をたたかれましたね、「何を言うか、だから今のあんたがいるのではないか」と言われて、あ〜その通りだと思っ

て、とても偉大な先生だった。

手塚治虫さんが、私が高校卒業した直後、18歳ですが、九州へ逃げてきたことがあるんですよ。手紙がきて助けてくれと。誰も連れずに来たと。そして旅館に行ったときに、「なんでおまえは『くもとちゅうりっぷ』みたいな漫画を描くんだ」って言われて、「明石で観てました。」と言ったら「え〜！」と膝抱えてでんぐりかえりましてね。「俺も観た、そこにいた」と。同日の同じ時間に同じ映画館で観ていたんです。不思議な縁ですよ

また、石ノ森章太郎氏とは、ふたりとも同年同月同日生まれなんですよ。アニメマニアでしょ。3人で自称“日本アニメマニア”と称して、そして、3人ともなんとかなった。

そういう幼少の頃からの経験や思い出や自分が身を置いた世界の体験。敗戦がどんなに無残なことか…身売ってお金を稼ぐ女性、一家を食べさせるために…少年の日から身をつまされる思いに目覚めていたんですよ。負けるとはどんなことか実体験として味わっている。

四国では山で暴れ、川で泳ぎ、九州では関門海峡を飛び込んで泳ぎまくっていた。

海岸に立ちましたら、漁師の息子に飛び込めと言われてましてね、「男なら飛び込め！」と言われたから飛び込み、海の浮力が猛烈に強い、真水と海水の浮力の差を身をもって悟ったんです。その後は、関門海峡で泳ぎまくり、魚をとって帰ってきたりしてました。絶対におぼれない男になったんです。

今は、山は入山禁止、川も遊泳禁止、海も禁止、今の若者はかわいそうですよ。こちらは存分にできた。

歴史の動きが変わる瞬間をこの眼でこの身で体験している。負けるとはどういうことか、戦いととはどんなことか、飢えるとはどんなことか…なにしろ学校給食が粉ミルクが時々でるくらい。

ただね、旅館のせがれだった同級生が上着をかしてくれたり、弁当をくれたり、優しかった。そういう友情にも恵まれて大人になったので、そういう漫画を描いているわけですよ。

あらゆるもの見て学習ができた、そういう世代なんです。その現実はものすごいですよ。

戦後の体験から、絶対に占領軍の施しはうけん！という自分の覚悟と…、外国に行っても絶対に授けるとかやっちゃいけない、食べ物を放りなげてあげてはいけない、どんな貧しい相手に対しても、跪いて手をさしだせば喜んで受けとってくれる。思想、宗教、信条、民族感情を絶対に傷つけるなというのが子どものころからの信念だった。

戦争漫画を描くときは、マナーは万全の配慮をしている。相手も国のために戦う、強者なんですよ。武士道、騎士道と同じようなことを描いている。映画もその当時、そういった映画をいっぱい観ることができた。その体験から我々は、人を描くときに人を傷つけない、誰にも敵意をもちたくない。戦う相手に敬意を払った戦いを描いている。みんなが信念のために衝突しているだけで、やむを得ず戦っている。それがずっと生きている。

これまでの様々な体験が体力と気力を助けてくれているんです。支えとなっている。壮大な大学院に行っていたようなものです。

今もどこも悪くないんです。病院で検査されましてね。女医さんに、その年になったら、どこか何かあってもおかしくないのに何もなし！と言われてましてね。不思議な人だと言われてましてね。暴れ回っていたのが俺の運命を決めたんだと。元気で現役で頑張ってます。

Q. 「水恋」や「湖春」に込める思いを聞かせてください。

A. 環境とか、人が自由に飲み食いできる清潔な水とか、身体を助けてくれるものを大事にしくちゃいけないという思いがずっとある。ですから、環境の保全は何よりも大事なことで、汚してもらいたくないんです。自分でも気をつけているし、環境の保全、清潔感を保って、飲み食いに不自由しない世界を守っていくのが人間のつとめだと思っています。高等生命体として。ですから、そういう漫画ばかり描いているんです。

福島県に伺って風景を見ると、自然環境と、そこでの楽しみ方は保全していかななくてははいけない。大事な大事な風景なんです。北海道から沖縄までいってますんでね。ヨーロッパにも行っています。福島県はきれいでしょう、しかも、あったかい、あったかい風景ですよ。それは自然環境の中では、もっとも幸せな場所ですよ、ほんとにいい場所です。そこを保全して、ずっと守っていきたい。温暖化やいろんな問題からも守って大事に大事にしていきたい。貴重な貴重な宝、天国ですよ。だからアルカティア（理想郷）という言葉がすきですね。自然環境がいかに大事か、それがよく分かるんです。

湖を見てほんとに嬉しいんです、大好きな人間なんです。SFマニアと思われて、機械工学とか科学ばかりだと思われているかもしれないけれど、自然環境が生命を支える根源なんです。是非守っていただきたい。（そんな思いをこめて…）

Q. 福島県民に対してひとことお願いします。

A. 福島県は、自然環境に恵まれた、とても素晴らしい場所ですよ。どうか、そこを大事に守りながら、皆さん、お元気に、その環境の中で頑張ってください。そこはアルカティアですよ。世界各地を見てますからね、悲惨な場所も見ているんですよ。福島県は環境的に非常に美しい、恵まれた場所です。これは、本当に大事にしくなくてははいけない。それを破壊することのないように、くれぐれもみなさん頑張ってください。

松本零士先生、貴重なお話をありがとうございました。

猪苗代湖・裏磐梯湖沼水環境
保全対策推進協議会 事務局